

SOUL OF CHOGOKIN®  
超合金魂

# GREATER MAZINGER D.C.

DYNAMIC CLASSICS



超合金魂 GX-73 グレートマジンガー DYNAMIC CLASSICS 解説書

グレート  
マジンガー

©ダイナミック企画・東映アニメーション

●本書の画像・イラストと実際の商品とは多少異なりますので、予めご了承ください。※画像はイメージです。



# グレート マジンガー

WORLD OF  
GREAT MAZINGER

の世界

## »» 物語

古の時代に絶滅していたはずのミケーネ人。しかし彼らは地底に帝国を築いていた。古代ミケーネ人の復活を予知していた兜剣道は、伊豆の孤島に身を潜めてグレートマジンガーの開発を進めていたのだった。

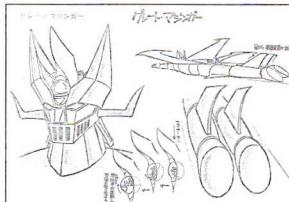
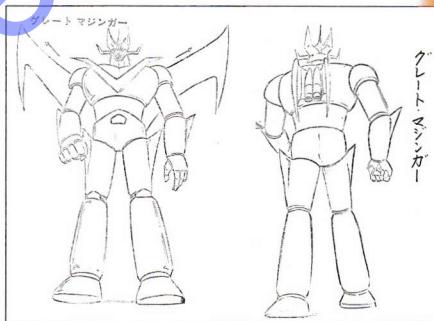
それから長い年月が過ぎた。マジンガーZとドクターヘルの戦いは終わり、世界に平和が訪れる。その一瞬の隙を突いて、ミケーネ帝国は進撃を開始した。ミケーネ人の頭脳を備えた戦闘獸は、マジンガーZを抵抗する力を失うほどに叩きのめす。マジンガーZが倒れる時、創造はグレートマジンガーの出撃を命じた。かくてグレートマジンガードミケーネの戦いが始まったのである。

グレートマジンガーを操るのは剣鉄也。孤児であり、幼い頃からグレートの操縦者として創造の手で鍛錬されてきた男である。しかし、そんな鉄也の磨きをかけたテクニックをもってしても戦闘獸は強敵揃いだった。ついにグレートは宿敵・暗黒大將軍を倒すものの、ミケーネ闇の帝王はドクターヘルを蘇生させ、新司令官、地獄大元帥を作り出した。地獄大元帥の悪辣な作戦に、グレートは次第に劣勢となる。いよいよ戦いが総力戦の様相を呈した時、アメリカから兜甲虫が帰還、マジンガーZが戦線に加わった。激闘の果て、鉄也は重傷を負いながらも、ミケーネを地上から追放する。偉大な勇者、グレートマジンガーはマジンガーZ、ダイアナA、ビューナスAとともにロボット科学博物館へ納められ、ひとときの休息に就いたのである。

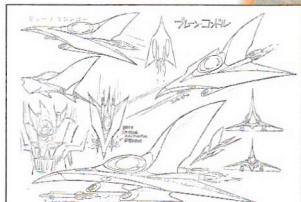
## »» デザインワークス



▲永井豪氏による頭部デザイン。極めてシャープであり、悪魔を思わせる迫力さえ醸し出している。



▲テレビ用に森下圭介氏が起こした頭部。この時、脚から翼が出て来る機能が追加された。



▲テレビ用ブレンコンドル。映画にはなかった着陸脚兼ミサイル発射孔が加えられている。

## »» 解説

『マジンガーZ』の続編企画は、放送から半年も経たない頃の1973年春から進められていたという。やがて『マジンガーZ』は大ヒット作品に成長し、全92話のロングラン放送を達成する。その間に続編の題名は『ゴッドマジンガー』から『グレートマジンガー』へ変遷する。企画書の時点では、剣鉄也と炎ジュンがゴッド軍団(のちにスクランブル騎士団に変更)と呼ばれるチームに所属し、他にも3名の仲間がいた。ゴッド軍団の設定は結果的に消滅するが、逆にそこを除けば完成作品と企画書の差異はネーミング程度のものであった。

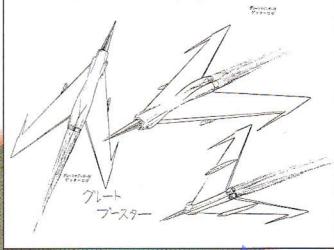
また、グレートマジンガーは1974年7月公開の劇場映画『マジンガーZ対暗黒大將軍』が初お披露目となるが、そのデザイン自体は映画公開約5ヶ月前に「テレビマジン」主催のオフィシャルファンクラブ会員証に使用された。ここから考えても、本作の企画がかなり先行していたことが窺い知れる。そして、映画『暗黒大將軍』を経て、1974年9月からテレビアニメーションシリーズ『グレートマジンガー』がスタートした。

グレートマジンガーはテレビと並行して『グレートマジンガー対ゲッターロボ』『グレートマジンガー対ゲッターロボG 空中大激突』、テレビ終了後も『UFOロボ グレンダイザー対グレートマジンガー』『グレンダイザー・ゲッターロボG・グレートマジンガー 戦決!大海獣』と多くの映画でも活躍。マジンガー、ゲッターロボ、グレンダイザー各作品世界の橋渡し的存在でもあるのだ。

▲映画『暗黒大將軍』用の全身設定。角田紘一氏による。この時点では背中に折りたたまれたスクランブルダッシュが存在したが、『マジンガーZ』第92話では既に省略されている。

## グレートブースター

超高速で飛行する翼。速度、攻撃力ともにスクランブルダッシュを凌ぐ。攻撃武器として発射することもできる。



## サンダーブレーク

落雷を呼び、電流を放つ。両手を用いる場合は、ダブルサンダーブレークとも呼ぶ。アギレウス戦では指が溶けたため、ビューナスAの指を用いて電流を誘導した。



# »»» グレートマジンガー 戦いの記録

マジンガーZの弱点を補う  
存在として作られた  
グレートマジンガー。  
ではその戦歴を見てみよう。

### マジンガーブレード

大腿部に収納した2本同時に用いる場合、ダブルマジンガーブレードと呼ぶこともあった。サンダーブレークの電流をマジンガーブレードを経由して放つ奥の手もある。



### ブレストバーン

胸部高熱板から放つ熱線。フラボス戦では最大出力で使用したため、ボディが赤熱化した。



### アトミックパンチ

前腕を高速回転しながら発射する。

### ドリルプレッシャーパンチ

アトミックパンチの強化タイプで、発射時に刃が飛び出す。



### グレートタイフーン

顔部ストリップから放つ強風。バーグル戦では決め技に用いられた。



### ニーインパルスキック

大型のスパイクを用いたヒザ蹴り技。



映画「マジンガーZ対暗黒大将軍」および、「マジンガーZ」第92話…  
マジンガーZの救出のために初出撃。その時点で装備していた武器はサンダーブレーク、ブリストバーン、グレートブーメラン、マジンガーブレード、アトミックパンチ、グレートタイフーン、ネープルミサイル。

第8話…前腕にドリルプレッシャーパンチを装備。

第11話…マジンガーパワーを使用して、渾身の力を發揮。

第15話…スクランブルダッシュの翼を切断技スクランダーカットに用いる。

第34話…脚部にニーインパルスキックとバックスピンキック用の武器を設ける。

映画「グレートマジンガー対ゲッターロボG 空中大激突」および第47話…グレートブースターが完成。

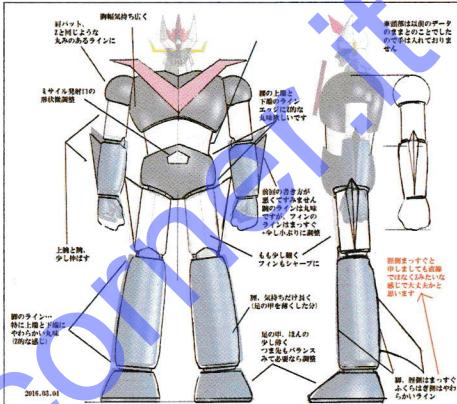
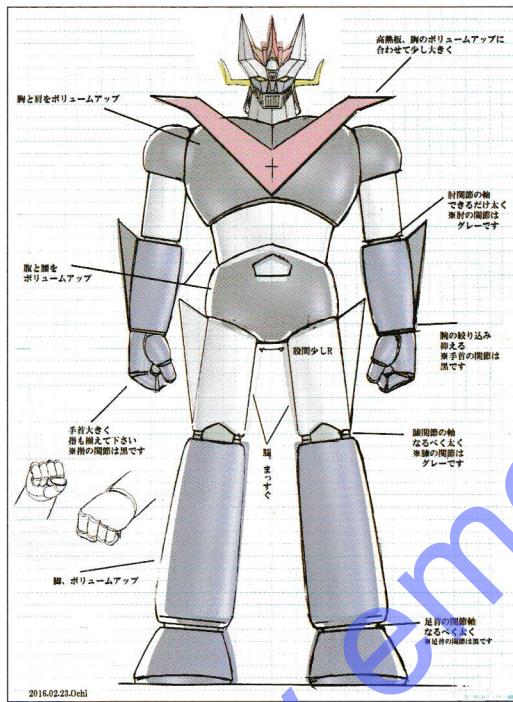
第51話…ブレストバーンをマイナス回路で冷凍光線として使用。

# MAKING OF GX-73

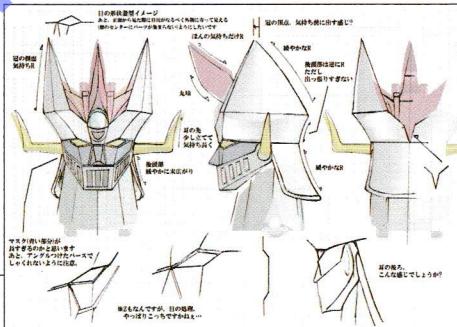
GX-73グレートマジンガーD.C.は越智一裕氏が総合監修を担当した。

ベースとなる設計用3Dデータを前野圭一郎氏(T-REX)が作成し、

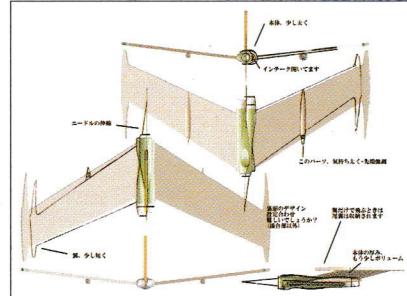
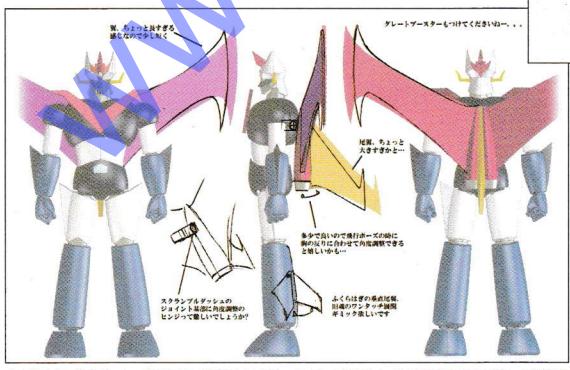
越智氏が修正を入れていく段取りで進められた。



▲3Dデータ修正3稿。グレートの特徴である下腕と太股のフィンは直線であること、ボディや四肢は丸みのあるラインであることなどが指定されている。また両脚から展開する翼はこの時点では差し替えを想定していたという。

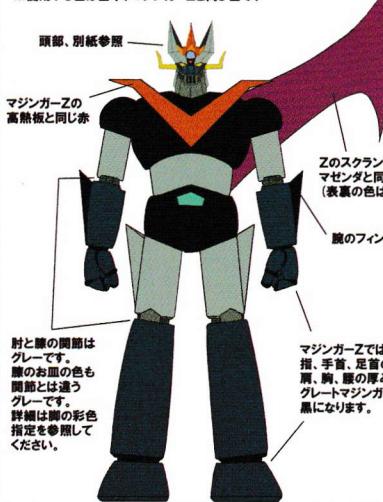


▼グレートブースターへの修正案。単独飛行時に露出する機首のニードルや、翼の長さや角度への細かい指示などが記されている。

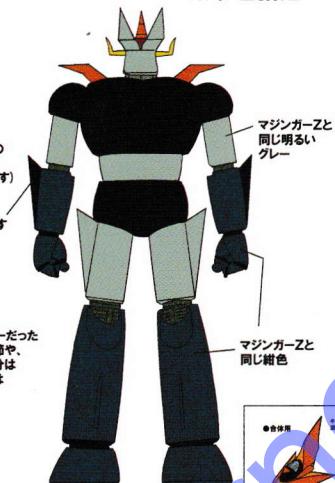


▲スクランブルダッシュのバランス修正。アクションポーズに合わせた翼の角度調整と、脚部垂直尾翼のファンタチ展開も提案された。またこの時点ではグレートブースターの付属は未確定だったようだ。

※使用する色は基本、マジンガーZと同じ色です

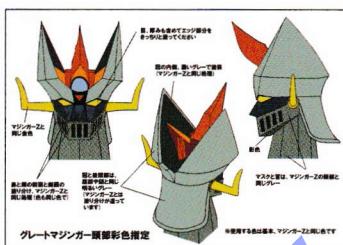


## グレートマジンガー(全身)彩色指定

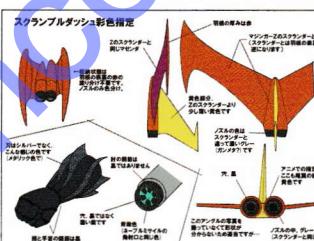


▼合体用と飛行形態の2種が用意されたフレーンコンドルの塗装指定。キャノピーの色表現はクリアバージョンと塗装の2パターンが提案された。

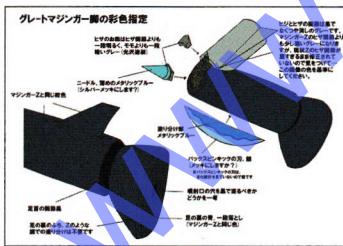
▲テレビアニメ用の色指定から導かれた全身の色彩指定。基本色と配色はマジンガーZとほぼ同じだが、指や足首の関節部が黒になっている。またスクランブルダッシュの色がジェットスクランダーとは表裏逆になっているのがポイント。



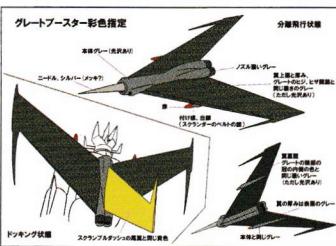
◀頭部彩色指定。頭の青い部分の塗り分けを含め、基本的なカラーはマジンガーZと同様。ただし冠の外側はマスクや首よりも明るいグレーを使用している。



◀スクランブルダッシュ、ドリルブリッシャーパンチ、パンチ発射口の色彩指定。ドリルブレッシャーパンチの刃の向きは、設定資料では右回りで描かれていた。また、両手から発射する場面で、左右が同じ右回りであることが多かったことから、D.C.版では左も右も右回りを探用している。



◀脚の色彩指定。脚部に装着するニーンバルスキック用ニードル、バックスピンギングの刃はメッキではなく、越智氏の指示に従い塗装表現となつた。なお足裏の緑にはマジンガーZのような塗り分けは存在しない。



◀グレートブースター彩色指定。スクランブルダッシュよりも色数が少ない印象だが、実際にはグレー系の色だけでも4種を使用。翼のカラーリングが表裏で微妙に異なっている。また劇中の印象から光沢仕上げが求められた。

## 総合監修 越智一裕

東映动画版グレートマジンガーは、大きく分けて初登場のマジンガーZ対暗黒大将軍版と、それをベースに修正・変更が加えられたテレビ版以降に分類でき、GX-73では後者のデザインを選択しています。それは、ドリルブレッシャーパンチやグレートブースターなどの追加兵器を再現するため。物語終盤に復帰したマジンガーZと並べるため。そして、ゲッターロボやグレンダイザーと一緒に共演することになる剧场作品においてもテレビ版のデザインで作画されているのですから、その選択は必然でした。

何から何まで手探りで苦労したGX-70マジンガーZ D.C.での経験があったので、グレートマジンガー D.C.の開発はそれほど大変にはならないだろうと高を括っていたのですが……甘かったです。映像や設定を確認しながらの検証にはGX-70以上の時間を要し、その判断には知恵熱が出るほどに悩まされ……設計担当の前野圭一郎さんには前回以上にお骨折りいただきました。開発スタッフの涙と汗の結晶として、新たなる偉大な勇者がここに誕生したのです!

# GREATMATING D.C.

DYNAMIC CLASSICS

S O U L F U N G O O K

Illustrated by Kazuhiro Ochi

